

研究論文

検定英語教科書における言葉の偏向

上 利 学

Language Bias in English Textbooks

Manabu Agari

0. はじめに

言葉は時代を映し出す鏡である。時代の変化が言葉に反映するさまは、歴史を振り返れば明らかである。古英語や中英語に目を向ければ変化は一目瞭然であるが、数百年という長い年月の経過は言うまでもなく、この半世紀に絞ってみても英語の変化に気づかされる。20世紀に目を向けると、1980年代以降、人種やジェンダーをはじめとする様々な領域で偏見であると解される表現を根絶しようとする動きが生じ（Crystal 189）、その結果、いわゆる *political correctness*（以下 PC）の社会的な動きが言葉の変化を引き起こすことになる。差別的な表現を扱う PC は、日本の中学校や高等学校で使用される英語の教科書にも大いに関連する問題である。したがって、PC が中学校と高等学校の検定教科書にどの程度反映されているのかは検討に値する。拙論では、パイロット的調査として、中学校と高等学校の教科書をそれぞれ2冊ずつ任意に選び、PC がどの程度反映されているかを把握し、また、PC に関わる語や表現を教育現場で活用するための視点を提示することを目的とする。使用する教科書は、*NEW HORIZON*（以下 NH）、*ONE WORLD*（以下 OW）、*CROWN*（以下 C）、*PROMINENCE*（以下 P）とする。

1. 教科書の中の言葉の偏向

検定英語教科書を対象とした今回の調査では、語句と文法に表現の偏向が見られた。具体的な内訳は、性差（75.1%）、人種（9.4%）、貧困（3.8%）、障害（2.8%）、その他（病気、年齢など8.9%）であった。以下に分析結果を示す。

人間全般を表す語の一つとして総称用法の *man* が挙げられるが、現代英語では避けられる傾向にある。*Oxford Dictionary of English*（2003）（以下 ODE）は、この語を使用すれば“*sexist or at best old-fashioned*”と見做されるとし、代用語として

the human race や humankind を例示している (s. v. *man*)。今回調査した範囲の用例を頻度の高い順に並べると, humans (16例: 単数形 3 例を含む), human beings (14: 単数形 1 例を含む), man (11: 内 2 例は単数の意), men (10), humanity (5), human race (2), mankind (1) となる。「人間」を表す語については, 中立的な語の使用が一般的である。

- (1) What if **human beings** stopped making weapons and put an end to war? (*P II*, 151)
- (2) The focus of education in this college is to explore **human beings**, ... (*C III*, 140)
- (3) Can immortality become a reality for **humans** someday by studying jellyfish? (*P II*, 77)
- (4) We **humans** must learn how to sustain our environment. (*C II*, 106)

上記の二語は現代英語で一般的である。Corpus of Contemporary American English¹⁾ (以下 COCA) によれば, humans と human beings の頻度はそれぞれ46,274と16,616である。後者は単数形 (14,016) を含めれば優に3万を超す²⁾。中立的な語は他にも挙げられる。Humanity と human race はそれぞれ5例と2例見られる。

- (5) ... it [going into space] is important for **humanity**. (*C I*, 21)
- (6) ... the 3.6 billion people who made up the poorest half of **humanity**. (*C III*, 51)
- (7) It's normal for human beings to be bilingual. About three-quarters of **the human race** grows up speaking two or more languages. (*C III*, 87)
- (8) we must reimagine our connection to one another as members of **one human race**. (*C III*, 134)

(5) は宇宙飛行士若田光一氏の寄稿文, (6) は裕福な8人の稼ぎが人類の半数に当たる最も貧しい36億人の稼ぎと同じという趣旨の文である。(7) は bilingualism をテーマとする章の一節である。同じ引用内の human beings の反復を避けるために使用されていると思われる。(8) は来日したオバマ前大統領が平和記念公園で行ったスピーチで, 平和に基づく協力により一つになった人類のつながりを強調している一節である。文脈上 humans や human beings では代用できない場面であると思われる。

一方, 現代英語では避けられる傾向にある man や men の頻度が高いという特徴

も見られる。要因の一つとして、用例の出典が、PC が盛んになる時期よりも古い点が挙げられる。

- (9) **Man** is a part of nature, and his war against nature is inevitably a war against himself. (*PI*, 8)
- (10) He reported on **man's** first view from space... (*PI*, 6)
- (11) The very nature of these inventions cries out for the goodness in **man**, (*P II*, 129)
- (12) Don't give yourselves to these unnatural **men**-machine **men** with machine minds and machine hearts! (*P II*, 130)
- (13) This kind of journey would be challenging for young people, to say nothing of a **man** in his middle age. (*C III*, 7)

(9) は Rachel Carson の *Silent Spring* (1962) からの一節、(10) は旧ソビエトの宇宙飛行士 Yuri Gagarin が人類史上初めて月面着陸を果たした快挙に触れた一文である。(11) と (12) は Charles Chaplin の風刺劇 *The Great Dictator* (1940) の “My Autography” が出典となっており、教科書では用例16例中 humanity (1 例) を除きすべて man 又は men が用いられている。(13) は松尾芭蕉の時代の旅は徒歩であった点に触れた一節である。旅に出るのは一般に男性であったと考えると男性形の使用に違和感はない。

上述した man や men の使用は PC が考慮されない時代と密接に関連していることが原因と考えられるが、21世紀に題材を取った場合でも man や men が散見されるのは特筆すべきである。

- (14) The combination of all three represents one of the greatest technical challenges known to **man**. (*P III*, 95)
- (15) Someone said that factories of the future will be run by a **man** and a dog. **The man's** role will be to feed the dog. (*C III*, 69)
- (16) The whole crowd in the stadium, as **one man**, as one nation, was chanting “Nelson! Nelson!” (*P III*, 145)
- (17) When **the first man** set foot on the moon, he said, “That’s one small step for [a] **man**, one giant leap for ***mankind**.” (*C I*, 96)

(14) は humanoid robot の完成に必要な3つの課題に触れた一節である。(15) は Lesson 5に後続するタスクに使われている文であるが、a man は女性を含むため不

適切である。(16)は1995年に開催された Rugby World Cup で地元の南アフリカチームが決勝に進み、試合直前に競技場の観衆が一体となっている様子を記した場面で男性形が使われているが、観衆には女性も含まれている。(17)は映画 *A Trip to the Moon* (1902) に触れた一節である。映画が制作された年代を鑑みると男性中心的な考え方を示す語の使用はやむを得ない。むしろ注目すべきは、*mankind* に「ただし近年、*mankind* の使用は避けられ、*humankind* などが使われる。」という注釈が付されていることである。言葉と社会の関連性に目を向けるという点で教育的意義があると思われる。

総称用法の *man* や *men* が特に顕著なのが、オバマ大統領が2016年に広島市の平和公園で行ったスピーチである。7例中、*humanity* (2例) と *human race* (1例) を除く4例がPCに違反している。

- (18) A flash of light and a wall of fire destroyed a city and demonstrated that **mankind** possessed the means to destroy itself. (*C III*, 131)
- (19) Artifacts tell us that violent conflict appeared with the very first **man**. (*C III*, 131)
- (20) We may not be able to eliminate **man's** capacity to do evil, (*C III*, 134)
- (21) All **men** are created equal and endowed by our Creator with certain unalienable rights, ... (*C III*, 135)

(21)は米国の独立宣言(1776)の一節であるため *men* の使用はやむを得ない。(18)~(20)は中立的な語で代用できると思われるが、戦争の文脈では男性形が相応しいとも言える。戦争を起こすのは男性だからである。Charles Chaplin の “My Autography” からの一節の *man* や *men* も21世紀の今から振り返れば、男性中心であるため適切さに欠けると批判することも可能だが、戦争や紛争を引き起こす主体が男性であることを考えると、むしろ適切であるとも言える。オバマ大統領の真意は推し量るしかないが、PCに無頓着であるとは考えにくいいため、*man* や *man-kind* は熟慮を重ねたうえでの選択であったと思われる。

人を表す語に男性中心的な考え方が反映されていることがある。Miller & Swift が指摘するように、*politician* や *neighbour* など性差のない語は男性と解される傾向がある(4)。この指摘は人を表す女性形を対に持つ語にも当てはまる。例えば、*poet* には *Longman Dictionary of Contemporary English* (2014) (以下 *LDCE*) が “someone who writes poems” (s. v. *poet*) と示す通り性別はない。Actor や *painter* についても同様である。しかし、それぞれ *poetess*, *actress*, *paintress* という女性形を持つが非標準という含意があるため (Miller & Swift 137)、現代英語では避けられる傾向に

ある。教科書では、一例を除き女性形は使用されていない。例外は、チンパンジー研究者の Jane Goodall (b. 1936～) の寄稿文の中で彼女の若い頃に触れた一節である (To earn the fare I worked as **a waitress**, living at home. (C I, 94))。その他は、性差のない形が男女ともに使われる傾向が強い。以下の例では、女性形を持つ一方で、中立形がすべて女性に対して用いられている³⁾。

- (22) She is said to have been a famous **actor**. (P II, 82)
- (23) Her mother was **a painter**, (P II, 114)
- (24) Amy Tan is a Chinese-America writer and the **author** of *The Joy Luck Club* (1989). (P III, 45)
- (25) Mariyan, a recently graduated **doctor**, wants her parents to do this for her. (P II, 183)
- (26) Simone Giertz, a Swedish **inventor** who builds stupid robots. (C III, 70)

女性形を持たない語は、必要に応じて woman や female を付して性差が示される。

- (27) she became the first Japanese **woman participant** with an artificial leg... (NH 3, 149)
- (28) Do you remember **the female athlete** who gave a wonderful speech in English? (OW 3, 60)
- (29) That is still the longest distance that any **female skier** has jumped there. (OW 3, 66)
- (30) In 2010, the computer system Akira defeated Shimizu Ichiyo, one of **the top women shogi players**. (C II, 40)
- (31) **the male students** ran around town making reservations at different restaurants while **female students** sold these places in line. (P III, 128)
- (32) The number of **male bonsai fans** in their thirties and forties has increased dramatically... (P II, 55)

(27) と (28) はパラリンピック代表の佐藤真海氏、(29) と (30) はスキージャンプの高梨沙羅氏と女性棋士の清水市代氏である。(31) と (32) を含めていずれも性別を明記する必要がある、或いは明記したほうが分かりやすい例である。逆に、性差を明示する必要がない時には中立的な語が用いられる。

- (33) Fukuhara Ai is an **athlete** who competes abroad. (OW 3, 64)

- (34) Takanashi Sara is one of the greatest **ski jumpers** that Japan has. (*OW* 3, 66)
- (35) Two **women actors** are talking to each other. One of them is a young girl suffering from a serious disease. The other is an android her family has hired to keep her company. (*CI*, 129)

ただし、(35) の *women* は不要である。指示対象の一人は “a young girl” と説明されており、アンドロイドも掲載写真から女性だと判断できる。女性にも *actor* が使われているが、*women* の付与は *actor* を男性と考える意識を拭い去ることが難しいことを示唆しているのではないだろうか。

中立形と女性形の双方を持つ語の中には、指示対象の性別に関わらず中立形の使用が基準となっている語がある。例えば、*host* は *hostess* と異なり、主催者の性別にかかわらず用いられる。動詞の場合も同様である。

- (36) Welcome to our program, “Wonderful World.” I’m your **host**, Jack McFly. (*PI*, 34)
- (37) **the host** is expected to entertain the guests ... (*P II*, 12)
- (38) Being late is like telling your **host**: “I had more important things to do than attend your party.” (*P III*, 71)
- (39) It [the city of Jintan] recently **hosted** an international bonsai exhibition. (*P II*, 55)
- (40) They met their American **host family**, the Davidsons. (*CI*, 48)
- (41) the **host countries** have created different sets of pictograms. (*CI*, 15)

(37) の話題は茶の湯である。説明に付された女性の写真から明らかなように、*the host* は女性である。(38) は性別の区別がないパーティーの主催者である。(39) は動詞の例であるが、中立形が無標 (unmarked) である。現代英語では *host* の性は男性に限らないが (*LDCE*, s. v. *host*¹⁾, n. 1.), *The Oxford English Dictionary* (*OED*) が示すように、中世では男性の役割であった⁴⁾。動詞は名詞の品詞転換により1485年以降使用され現在に至るが、主人が女性であっても動詞は中立形のままである。(40) と (41) は無標の中立形が句となっている例であり、女性形 *hostess* では代用できない。

男性中心の考え方が語に反映される例は他にも見られる。「師匠」に相当する語には *master* が使われるが、例えば、ハワイの伝統的な航海技術を持つ人物は **master** Mau Piailug of Satawal (*CI*, 31) と記され、盆栽や将棋でも *master* が使わ

れる (a Japanese bonsai **master** (*P II*, 53); a retired professional shogi **master** (*C II*, 30))。いずれの場合も「師匠」は男性であるが、女性が「師匠」の場合には、女性形 *mistress* は異なる意味をもつため使用できない。Miller & Swift (145) は興味深い逸話を紹介している。イェール大学の寮長のポスト the post of master は男性に占められていたが、1970年代初期に初めて女性が就任した時に呼称に関する混乱が生じた。のちに女性も就任できると発表したか、呼称は変更しなかったということである。

呼称の問題はペットや飼い主にも及ぶ。*The Oxford Dictionary of New Words* によれば、animal companion は、動物を人間の単なる所有物或いは劣等種という pet がもつ軽蔑的な含意を避ける代用語として1980年に現れた (s. v. *animal companion*)。この新しい表現は、毛皮、食料、実験のために動物を利用しないといった動物の権利に対する意識の高まりとともに広がりを見せた (Hughes 213)。教科書では以下の例が見つかったが、飼い主には a pet owner という中立的な表現がある一方で、master が使われているのは興味深い。

- (42) Studies now show that **pet animals** have not only common emotions such as pleasure and anger, ... If you are a **pet owner**, you are almost sure to agree with that. (*PI*, 23)
- (43) She [a dog] was waiting for the **master** to continue playing their game. (*CI*, 76)

master を中立的な語で代用することは可能だが、複合語になると一部を代用することは難しい。Miller & Swift は、masterful, mastery, masterpiece, mastermind が継続的に用いられている状況を受けて、master を “a useful sex-neutral term” と位置付けている (145)。一方、*Grammar and Gender* には、master や masterpiece の代用語として前者には head や expert、後者には great work や best work が挙げられている (183)。複合語の構成要素の一部である master が男性偏重か中立かは意見の分かれるところだが、教科書では以下の3例が見られる。(46) の mastermind は女性に使われている。

- (44) Anpanman ... was the superhero of his **masterpiece**. (*PI*, 82)
- (45) Jakuchu ... donated his **masterpieces** to temples. (*P III*, 22)
- (46) The **mastermind** of AS [artificial stupidity] is Simone Giertz, a Swedish inventor who builds stupid robots. (*C III*, 70)

人を表す語が A and B のようにペアを構成する場合、語の順序には性差や年齢が大きく関与している。現代英語では、man and woman や boy and girl のように、男女が併記されるときは男性が先行する傾向が強く、親子関係の場合も father and son や mother and daughter のように、親が先行する語順が一般的である（上利 15）。教科書の例の大半はその例に漏れない。boys and girls（OW 3, 34：動物園の来客に対する呼びかけ）、Father, Mother, and Margot（OW 3, 43：Anne Frank の日記）、Father and Mother（OW 3, 46：Anne Frank の日記）、men, women and children（C III, 131：Obama のスピーチ）、brothers or sisters（C I, 114：写真展のガイドの説明）、men, women, and little children（P II, 129：Charles Chaplin の“My Autography”）などが挙げられる。A man and his wife（C III, 143：Paul W. Gallico（1897-1976）の *The Silent Miaow*（1964））は性差別的な表現として興味深い。Miller & Swift によれば、この句は、女性は男性と違って一人の人間ではなく妻の役割を担わされている（105-106）。COCA によると、man and wife（406例）よりも husband and wife（1,955例）が一般的である。やや時代遅れの感が否めないこの句の使用は、出典が Paul W. Gallico（1897-1976）の *The Silent Miaow*（1964）である点に起因すると思われる。

例外は、Mom and Dad（P I, 157：Anthony Lentini（1995）の“Autumntime”）、The mother and father（C I, 78：Jim Schicatanio の“Homework”（2003））、及び Malala Yousafzai のノーベル平和賞受賞スピーチである。教科書に掲載されている受賞スピーチでは、彼女は同士に 4 回“Dear sisters and brothers”と呼び掛けているが、実際のスピーチでは、この他に“Dear brothers and sisters”を 2 回使っている⁵⁾。彼女は、特に若い女性の教育に重点を置いているため、男性中心的な呼称に加えて、女性が先行する呼称を意識的に用いたと思われる。性差を意識した同様の表現は“a girl or a boy”にも見られる（“Let this be the last time that a **girl or a boy** spends their childhood in a factory.”（P II, 107））。

性差に関する例が圧倒的に多い中、次に頻度が高いのが人種や民族に関する表現である。中でも先住民の呼称が大半を占めている。カナダの先住民は Eskimo と呼ばれていたが、“eater of raw meat”の意味を持つため、今では Inuit を使っている（Hughes 127）。教科書でも the Inuit people と the Inuit（共に C III, 56）が使われている。米国の先住民についても、時代錯誤的で不適切な Indian ではなく（ODE, s. v. *Indian*）、Native American が適切な呼称とされる。しかしながら、Native American の American はイタリアの冒険家 Amerigo Vespucci に由来するように欧州起源であるためこの呼称は不評となり、むしろ Cherokee や Navajo などの個々の部族名の使用が推奨されている⁶⁾。教科書では the Cherokee Nation（C II, 67）、the Eastern Band of Cherokee Indians（C II, 67）⁷⁾が使われている。また、総称的な Native American(s)

(*CI*, 169; *CII*, 67) は、呼称自体に問題はないが、*native* は注意を払うべき語である。名詞として単独で 사용되는場合は、欧州の植民地主義と密接に関連し、先住民を僻地に住む非白人とみなす侮蔑的な含意を持つ (*ODE*, s. v. *native*)。この例は教科書には見られないが、否定的含意を持つ形容詞⁸⁾ が 2 回使われている⁹⁾。

(47) I read about how this **native** Hawaiian learned traditional navigations skills
... (*CI*, 31)

(48) Dereck Kayongo, a **native** Ugandan, arrived in the U.S. for the first time in
early 1990s ... (*PIII*, 40)

(47) はハワイの伝統的なカヌーの操法を熟知した先住民であることを示す必要があるが、(48) は石炭のリサイクルを始めたウガンダ人 Dereck Kayongo の活動を扱った一節であり、*native* を使う必然性はない。

人称代名詞も性差に関連して浮上する問題である。例えば、*person* のように性差のない語は、従来は *he* で受けたが、現代英語では *he* or *she* や *he/she* が一般的である。打ち解けた状況では、話し言葉でも書き言葉でも *they* が一般的である (Miller & Swift 48)¹⁰⁾。教科書では性差に配慮した使用が一般的である (*who*→*him* or *her* (*PII*, 83); *a member*→*he/she* (*PIII*, 72); *another person*→*his* or *her* life. (*CII*, 55); *each subject*→*his* or *her* (*PIII*, 80); *one famous person*→*him* or *her* (*PII*, 45); *a host*→*his* or *her* (*PII*, 14))。複数代名詞の唯一の使用例は Malala Yousafzai のスピーチに見られる (Let this be the last time that **a girl or a boy** spend **their** childhood in a factory. (*PII*, 107))。性差のない名詞を *her* で受けている例 (*nature*→*her*: *CII*, 107) が一例あるが、自然を母と見做す比喩はヨーロッパの伝統である (Michel Ferber, s. v. *Nature*)¹¹⁾。

一方、男性人称代名詞が使用されている例が 3 例あるが、うち 2 例は PC との関連が薄いことが原因と考えられる。一例は Rachel Carson の *Silent Spring* (1962) からの引用 (**Man** is a part of nature, and **his** war against nature is inevitably a war against **himself**). もう一例は Peanuts cartoons の作者 Charles M. Schulz (1922–2000) の言葉である (“... it would be the ability for **each individual** to learn to laugh at **himself**.”)。残り一例は女性を含むにもかかわらず *he* が用いられている例である (What does **the teacher** mean when **he** says, ... (*PIII*, 99))。性差のない語を無意識に男性と解した例であろう。

これまで、総称人稱の *man*, *doctor* など性差のない語、語順、人種に関わる呼称、人称代名詞について、差別という観点から言葉の偏向を観察した。概して、中立的な表現を用いるという配慮が見られたが、PC 以前が出典となっている例を中心に

現在では問題視される偏った表現が散見された。このような偏向した表現をどのように扱うべきかは次節で検討する。

2. 言葉の偏向から浮かび上がる課題

本節では、上述した言葉の偏向からどのような課題が浮き上がるかを検討し、教育現場で生かすことが可能な視点を提示する。口にすることが憚られる話題については婉曲的な表現を探るものだが、英語においても同様である。障害については、disabled people (NH 3, 149), the disabled (PI, 129, 132 (2例)), athletes with disabilities (PI, 130) のように異なる表現が用いられているが含意が異なる。OALD (s. v. *impaired*, 2) によれば、disabled people は “sounds more personal” という理由で the disabled よりも好まれる。つまり、前者は disabled であっても人が表記されているが、the disabled では文字通り障害が前面に出て、人が背後に消えてしまう。一方、disabled people も、人を中心とする people with disabilities と比較すると障害が目立つ。同じことが poor (PI, 50) や the poor (C III, 45) にも言える。教科書では婉曲語が見受けられないが、deprived や needy、或いは人を中心とした people in poverty などとの違いを調べることは、表現の違いを単なる言い換えと考えるのではなく、捉え方の違いが人に対する態度と関連していることを考える有益な機会となる。障害に関しては blind (the pianist was **blind** (CI, 47)) も使われているが、直接的な言い方であるため visually impaired など代用されることがある。高校生であれば impaired が難解であるとは言えないだろう。中学校では難易度の問題があるが、簡単だが差別的だと受け取られかねない blind がよいか、それとも難しいが相手を配慮した visually impaired がよいか、生徒を交えて議論することも有意義であろう。

婉曲表現の重要性は前述した a native Ugandan にも当てはまる。native が余分である点は指摘した通りだが、明記する必要がある時は中立語である indigenous が望ましい。とりわけ、原始的、後進的といった否定的な意味を纏う語の使用には注意を要する。C II (16) では、オーストラリアの砂漠横断冒険を行った白人女性 (a young Australian woman)¹²⁾ が旅の途上で Aboriginal people に会会う。表現自体に問題はないものの、長い迫害の歴史が示す通り、先住民はオーストラリア国民であっても白人と異なる扱いを受けてきた点に注意を向ける必要がある。2008年に Kevin Rudd 首相が先住民に公式謝罪した際、彼は indigenous peoples を使用しただけでなく、先住民と他のオーストラリア人に触れた場面では極めて稀な語順である indigenous and non-indigenous Australians を使用している¹³⁾。COCA では non-indigenous が先行する例は55例あるが、逆の語順の例はない。Rudd 首相はオーストラリア国民の融合を図るために先住民に配慮した語順を意図的に用いたものと思

われる。同様に、白人と白人以外が対句を形成する時も一般的に白人が先行する。COCA では white(s) and non-white(s) 77 例に対し、non-white(s) and white(s) は 11 例に過ぎない。人種や民族に関する場合は、語順と（差別）意識が表裏一体であることを示す例である。白人を優先する表現を無批判に使うことは、たとえ無意識であれ表現の背後に潜む差別意識を承認することに等しい。表現に対する鋭敏な眼差しは、白人優先の意識を客観視する機会を作ることに繋がる。

白人と白人以外の区別は先進国と途上国の区別に対応する。先進国には developed (*P III*, 53, 111), 途上国には developing (*P III*, 111) が当てられるが、途上国を示す語の変化の推移 (backward→underdeveloped→developing) に着目し (Hughes 145), 新たに使われ出した肯定的なニュアンスを持つ emerging も含めて、意味の違いや変化の理由を差別的な意識と関連づけて考えることも有益だと思われる。

性差について男性中心の世界観が言葉に反映されている点に触れたが、女性宇宙飛行士がいる中では、無人飛行に言及する場合に unmanned (*P I*, 112) の適切性が問われる。NASA では「有人」を表す語を manned ではなく crewed と正式に名称を定めているが¹⁴⁾、これに倣えば uncrewed が考えられる。また、「師匠」が女性の場合に男性形 master を使うのか、master plan や master of ceremonies などの複合語や句の場合は一部又は全面的に変更するのか、それとも性差の感じ方は語句によって異なるため柔軟に対応すべきかなど、女性の地位向上によって旧来の男性を中心とする語句の適切性を問う余地は十分にある。Father of the Paralympic Games (*P I*, 123) や founding father などと同様である。創始者が女性の場合は性差のない語にすべきか、或いは the Founding Father of the Constitution のように定着した表現であっても代用語に変更すべきか、という問題は、男性優位の世界を見つめ直す意味でも一考の価値があると思われる。一方、戦争に関わる文脈では Chaplin の「自伝」のみならず、オバマ大統領のスピーチにおいても man が使われている。戦争を引き起こしたのは男性であっても中立語を用いるべきか、それとも戦争責任を明確にするために男性形を使用すべきか、これは議論に値する論点の一つになるとと思われる。PC の機運が高まる前後で同じ指示対象に対して異なる語が使用されている理由や社会的背景を探ることは、言葉と文化の関連性に対する理解を深め、更に言葉に対する感受性を育む利点があると考えられる。

3. 終わりに

小論では、PC の観点から教科書で使用されている差別に関わる表現を調査した。人種や、性差、障害などについて、概ね配慮が施されていることが明らかとなったが、差別的であると解される例も散見された。小論の目的は PC に違反する例を探し出して批判することではなく、言葉が社会や文化を映し出す鏡の役割を果たして

いる点に着目し、両者の関係に目を向ける契機となるよう意図したものである。英語における言葉の偏向に注意を向けることによって、少なくとも英語を母語とする社会では、男性、白人、そして健常者が中心となっている状況が浮かび上がった。今回取り上げた言葉の問題が表層的な操作にとどまることなく、人権や差別などを含む社会の問題に目を向け、議論の場を作る糸口になることを期待したい。重要な点は、正解を示すことではなく、あるべき姿を求めて様々な角度から模索し、多様化する社会に対する理解を深めることである。

注

- 1) COCA は1990年から2019年までを範囲とする現代アメリカ英語の言語資料である。2020年3月に更新され、語数も10億語を超えている。
- 2) 他の類義語の頻度については上利(3-4)を参照のこと。
- 3) spectators (*P III*, 143) は男女を含むが, farmers (*C III*, 17), heroes (*C I*, 172), sculptor (*P II*, 114), astronaut (*P I*, 6) は男性を指す例しか見られない。
- 4) “A man who lodges and entertains another in his house” (*OED*, s. v. *host*, sb², 1).
- 5) <https://www.nobelprize.org/prizes/peace/2014/yousafzai/26074-malala-yousafzai-nobel-lecture-2014/>
- 6) *The Official Politically Correct Dictionary and Handbook*, p. 37. *The Oxford Dictionary of English* (2003) (s. v. *Indian*) も参照のこと。
- 7) the Eastern Band of Cherokee Indians は正式名称であるため、名称中の Indians に軽蔑的含意はない (<https://ebci.com/government/>)。
- 8) 形容詞の native についても *Oxford Advanced Learner's Dictionary*, 7th edition (2005) は “sometimes offensive” としている (s. v. adj. *native*)。
- 9) 他の1例 (*P III*, 71) は先進国を含む文化に触れており差別的な含意はない。
- 10) 総称人称に関わる代名詞の使用状況については Anne Pauwels を参照のこと (563-65)。
- 11) 自然を母と見做す例を挙げておく (Without Mother Nature we wouldn't even be alive. (*C II*, 206))。
- 12) 掲載されているカラー写真から判断すると、この女性は白人と思われる。
- 13) <http://museum.wa.gov.au/explore/articles/national-apology-stolen-generations>
- 14) *The Official Politically Correct Dictionary and Handbook*, p. 14.

教科書

NEW HORIZON English Course 1, 2, 3 (東京書籍), 2019年.

ONE WORLD English Course 1, 2, 3 (教育出版), 2016年.

CROWN English Communication I, II, III (New Edition) (三省堂), 2019年.

PROMINENCE English Communication I, II, III (東京書籍), 2019年.

コーパス

Corpus of Contemporary American English (COCA).

<<https://www.english-corpora.org/coca/>>. Last accessed January 2021.

参考文献

Baron, Dennis. *Grammar and Gender* (New Haven and London: Yale University, 1986).

Beard, Henry & Christopher Cerf. *The Official Politically Correct Dictionary and Handbook* (New York: Villard Books, 1993).

Crystal, David. *The Cambridge Encyclopedia of the English Language*, 3rd ed. (Cambridge: Cambridge University Press, 2018).

Ferber, Michael. *A Dictionary of Literary Symbols* (Cambridge: Cambridge University Press, 1999).

Holmes, Janet & Nick Wilson. *An Introduction to Sociolinguistics*, 5th ed. (London: Routledge, 2017).

Hughes, Geoffrey. *Political Correctness: A History of Semantics and Culture* (Oxford: Wiley-Blackwell, 2010).

Knowles, Elizabeth & Julia Elliott. *The Oxford Dictionary of New Words*, 2nd ed. (Oxford: Oxford University Press, 1997).

Miller, Cathy & Kate Swift. *The Handbook of Non-Sexist Writing for Writers, Editors and Speakers*, 2nd ed. (London: Women's Press, 1989).

Pauwels, Anne. "Linguistic Sexism and Feminist Linguistic Activism," in *The Handbook of Language and Gender*, ed. Janet Holmes and Miriam Meyerhoff (Oxford: Blackwell, 2005), pp. 550–70.

Simpson, J. A. & E. S. C. Weiner, eds., *The Oxford English Dictionary*, 2nd ed. (Oxford: Clarendon Press, 1989).

Talbot, Mary M. *Language and Gender*, 2nd ed. (Cambridge: Polity Press, 2010).

上利学「現代英語に底流する性差別」, 『広島文教グローバル』第4号, 2019年, pp. 1–19.